

ハイドン (Franz Joseph Haydn) (1732 ~ 1809) [第 2 回目]

文責：どくとるA

ハイドン解説 3 回シリーズの 2 回目となる今回は、「エステルハーゼ侯爵家に仕える」をお送りします。

[エステルハーゼ侯爵家に仕える]

1761 年 5 月 1 日、ハイドンに人生の好機が訪れる。オーストリア東端のアイゼンシュタット（現在はオーストリアのブンゲンラント州都）に居城をもつハンガリー貴族パウル・アントン・エステルハーゼ侯爵の副楽長に採用され、以後ハイドンは、エステルハーゼ家の当主 3 代に仕えることになる。1762 年、死去した兄パウル・アントン侯の跡を継いで侯爵家の当主となったニコラウス・ヨーゼフ侯は、洗練された趣味をもつ音楽愛好家であった。アイゼンシュタットの城は、ほどなくニコラウス侯には手狭なものとなってしまった。彼は、ノイジーデル湖を挟んでアイゼンシュタットの対岸（現在はハンガリーのフェルテード）に広大な夏の離宮エステルハーゼを建設し、ここに音楽の殿堂をつくった。副楽長のハイドンはニコラウス侯のために、交響曲、オペラ、室内楽曲、ダンス音楽など、大量の楽曲を書かなければならなかった。それに加えて、他人の作品を含む音楽の稽古と本番での指揮、歌手の指導、楽器と楽譜の管理が課せられ、必要とあればオルガン、ピアノ、バイオリンを演奏し、配下の楽師たちのいさかきを調停することも任務であった。1766 年に楽長であったヴェルナーが死去した後、ハイドンが彼の後を継いで楽長となつてからは、これに教会音楽の作曲・演奏が加わった。激務とウィーンから遠いエステルハーゼ宮に隔離された状態にしばしば愚痴をこぼしたが、18 世紀の音楽家としては恵まれた境遇にあった。1779 年に結ばれた契約書では、自作品を楽譜出版業者に売り、代金を受け取る自由を認められている。主人のために作曲した曲を売る自由を与えられることは、当時としては驚くべき待遇であった。その結果、ハイドン作品はエステルハーゼ宮の客にとどまらず、多くの人々の耳に届くことになり、彼の名声はヨーロッパ中に広がった。1790 年、ニコラウス侯が没し、その子アントン侯は邸内の音楽組織を大幅に縮小した。ハイドンは楽長の称号を与えられながらも、侯爵家から離れ、広い世界を旅行する自由を獲得する。

[ミニコラム：ハイドンの結婚生活]

ハイドンは、28 歳のときにウィーンの理髪師ケラーの娘テレゼに恋するが、彼女は修道院に入ってしまった。ケラーは、テレゼの姉のマリア・アンナ・アロイジアとの結婚を勧め、ハイドンは 1760 年 11 月 26 日彼女と結婚した。彼女はハイドンよりも 3 歳年上で、性格は怒りんぼでやきもち焼き、家政の能力に乏しく、なによりも自分の夫が音楽史上稀に見る才能に恵まれた作曲家であることを、理解することができなかった。2 人の間に子どもは無く、ハイドンが 65 歳のときに別居し、リウマチに苦しみながら、夫に先だつて 71 歳で世を去った。